

業績不振の兆候をとらえる 定性面の着眼点

取引先の実態把握のためには、決算書から定量的な情報を読み取ったうえで、定性面と照らし合わせることも重要だ。本稿では、特に業績不振の兆候が現れやすい着眼点を4つ紹介する。



解説●北野信高 帝国データバンク営業企画部課長

決算書だけでは不十分！

取引見直しを回避するために
決算書进行操作している場合も

融 資の可否を検討する際、いの一歩に決算書の確認と考える担当者は多いのではないだろうか。

決算書の損益計算書や貸借対照表の状況からは、企業の収益性や安全性、効率性などを確認することができる。企業が有形・無形の資産を活用して事業を行った1年間の結果が、決算書となって定量的に表れる。

ゆえに決算書を確認する必要性について疑う余地はないが、重要なことは、決算書だけで企業を理解しようとするのではなく、決算書を通じて企業の強みや弱みに考えを巡らせることだ。すなわち、普

段企業と接する中で得ている情報を決算書と対比して検証することである。

「あれ。在庫勘定がかなり増えているが、事務所にはそんな雰囲気は感じなかったな」「採用にかなり力を入れていると言っていたが、採用費はそれほど増えていないぞ」など、日々の渉外活動で得られた定性的な情報を決算書に照らし合わせることが、企業実態をより立体的にとらえていくことにつながるのだ。

中小企業の決算書は粉飾されている可能性があり、複数の決算書が存在することも珍しくない。

ペアリング大手のNTN

(東証プライム)の代理店として知られていた堀正工業は、2022年9月期に年商約68億円を計上していたが、2023年6月に粉飾決算が発覚し、債務整理を弁護士に一任した。

各金融機関は堀正工業について「平均5行・約50億円前後の有利子負債がある」と把握していたようだが、ふたを開けてみればノンバンクを含む金融債権者の数はその10倍で、負債総額は6倍の300億円規模にもなった。

これは簿外処理による借入金金の過小計上という粉飾決算であり、堀正工業は金融機関ごとに異なる決算書を提出していたのだった。

取引見直しが存続に直結するため粉飾…

企業が粉飾決算に手を染め、金融機関や取引先に対して複数の決算書を作成する要

因は、実態よりもよく見せないと取引継続が危ぶまれると考えるからだ。

財務面が悪化し、金融機関から融資継続の前提として利益転換や実質債務超過状態の解消が示唆されているケース、あるいは官公庁案件を手がける会社が入札資格を維持できなくなるケースが、経営者が粉飾決算に手を染める動機につながる。

共通しているのは、資金繰りや受注など、企業の死活問題に直結するような外部からのプレッシャーである。

また、多くの中小企業は体制面を含め計数管理が十分ではなく、企業実態を正しく決算書に反映できないケースもある。こうしたものまで粉飾と呼ぶのかは別としても、提出された決算書を鵜呑みにしてはならず、定性面と併せて総合的に判断していく必要がある。

◀次のページでは4つの着眼点を解説！